

元ヤンでシングルマザーのあゆみ。
男勝りを演じて強く一人息子を育ててきたそ
の平穏な生活はふいに終わりを告げる。

排便姿を覗きみる息子が目覚めさせていく変
態によって・・・



俺が、いや俺達親子が堕ちてしまった
始まりはある日に前触れもなく起こっ
た。
帰宅すると母がお腹を抱えてうなっ
ていたのだ。



「ああ・・・やばっ、イテテテっ！」
「ん、母ちゃん、どうした？」
「なんか、当たってみてえでさ、腹
が・・・超イテえんだよ・・・」

「そんなに痛いのか？」

「このあたしが痛がるくらいだぞっ！……
っテテテッ」

「そんなにひどいなら病院いく？」

「まっ、間に合うかよ！もう駄目……ちょ
っと行ってくるわっ！」

「えっ、どこに？」

「トイレだよっ！言わせんな！」

ぐぎゅるるへ



本気で辛そうにトイレに向かって駆け出した母が少し心配になった俺が後を追うと、トイレのドアは開け放たれたままになっていた。よほど焦っていたのだろう。

更に心配になった俺は悪いと思いつつもそっと中を覗いた。そこには便器に跨り苦悶する母ちゃんの姿があった。

「はあはあ・・・やべー、すげえの出さう・・・」



「来たっ、きたきたあー！すごい糞っ出しち
まうよおおー！」

母ちゃんが叫ぶと共に肛門がムリツと盛り上がる。次の瞬間、下品で汚らしい排泄音を鳴らしながら大量の糞が次々と肛門から排出されていく。



その姿を見た俺の中からは母親を心配する気持ちは無くなっていた。いつの間にか股間は硬く勃起あがって鼻を突く耐え難い母ちゃんの糞の悪臭にさえ興奮を覚えていたのだ。



それから

数日後・・・

「なあ、買いもん行くけど一緒に行くか？」

「い、いやいやっ、俺はいいよっ！」

「ふっん、珍しいね・・・」



俺はあの日以来、母ちゃんを避けていた。
妙に意識してしまっていたのと、母親の排泄で
興奮してしまった自分の中の変態性を認めたく
なかったのかも知れない。

「お前、なんか最近おかしいよな？」
「気のせいだろ？俺、全然普通だし・・・」



「・・・見たろ？」
「え・・・はっ？な、なにを？」

「あたしが腹痛くて。。あれした日。心配で見にきたんだろ？」

「う、うん。まあ。。」

「あれから、なんかお前の態度おかしいし。。しっ、仕方ねえ
たろ！女だって母親だって、出るモンは出るんだよ！そんなこと
で軽蔑されたってどうしていいか分かんねえよ！」

俺の態度が知らず知らずのうちに母ちゃんを傷つけてしまってた。
いた。違うのに。。本当のことを言えない理由があったんだ。
逆に俺が軽蔑されるから。でも母ちゃんが傷つくくらいなら。



「母ちゃん、違っんだ・・・俺は・・・」

「言わなくていいよ！母ちゃんだって恥ずかしいんだぜ、臭いだって量だってあんなによ・・・息子に見せるもんじゃねえよな・・・はあ・・・」

「違っんだよっ！」

「えっ？」

「あの日、母ちゃんが糞垂れてるところ見て・・・俺興奮してた！なんでか、めちゃくちゃ勃起までして・・・母親がうんこしているとここで興奮するなんて言えるワケないじゃないか！それに・・・それからなんか母ちゃんのこと妙に意識しちゃって・・・」

「おっ・・・お前・・・それ・・・」



「お前、実の母親に・・・しかもトイレしてる
とこでって・・・凄すぎだろ・・・」

「ごめん・・・軽蔑されて当然だよな・・・」

「い、いやさ、なんてゆうか女としてはエロ
い目で見られるのはちょっと嬉しいっていう
かなんちゅうか・・・」



「そ、そうなんだ！良かった、俺母ちゃんに嫌われるのが怖くてさ。あの時のこと・・・頑張っ
て忘れるからさ・・・」

「頑張らないと忘れられないくらい・・・興奮し
たのかよ？」

ドキドキ♡



かああああ

「うん・・・すげえエロくて・・・俺あれからず
っと一人でする時もあの時のこと・・・」

「や、やべえこと言うなよ！・・・ほ、本当はもう
一回見たかったりするのかよ？」

「え？み、見たいよ！母ちゃんトイレ・・・」

「は、恥ずかしいから・・・小便でいいか？」

そういうと母ちゃんはパンツを脱いで上着を捲った。肉感的なメスの身体にたちまち俺のチ○ポはバキバキに勃起する。

「す、すげえ！母ちゃんエロすぎるよ・・・」



「き、今日だけ！小便だけだからなっ！」

「わ、分かったよ！早く、早く小便出してみてよ！」

「ああああっ・・・恥ずかしくて変な気持ちになっちゃまうじゃないか！さあ、よく見ときなよっ！」

「母ちゃんっ、母ちゃんの小便っ！チ○ポ痛い
ぐらい勃起するよお！」

「ば、バカあ！自分の母親の小便でそんなにし
てっ、変態バカ息子っ・満足したかい？」

「俺っ、母ちゃん俺！やっぱり母ちゃんのうん
こが見たいよ！もう一回だけっ！お願いだから
見せて欲しいんだっ！」

「もう・本当にバカで変態なんだから。女が
そんな風に頼まれて断れるワケないだろ」



「母ちゃん、普段は便秘だから・・・コレしてく
れるかい？」

「これ、浣腸？どうすればいいの？」



「先っぽ、母ちゃんのケツの穴に差して・・・」

「こ、こっ？これでいいの？」



「そう、それでいいんだよ。そしたら、そのま
まチューって液入れてえ・・・」

「はあはあ・・・じゃ、じゃあ、行くよっ!」

「あ・・・あああつ! 浣腸つ来てる!」

「す、スゲっ、俺、自分の母ちゃんに浣腸ブチ込んで糞出させようとしてるんだね・・・」

「んんんっ、そ、そんなエロいこと言われ
たらあ・・・あつ、出る! 限界っ! 糞出そ
うっ! 息子の前で糞出ちゃううう!」

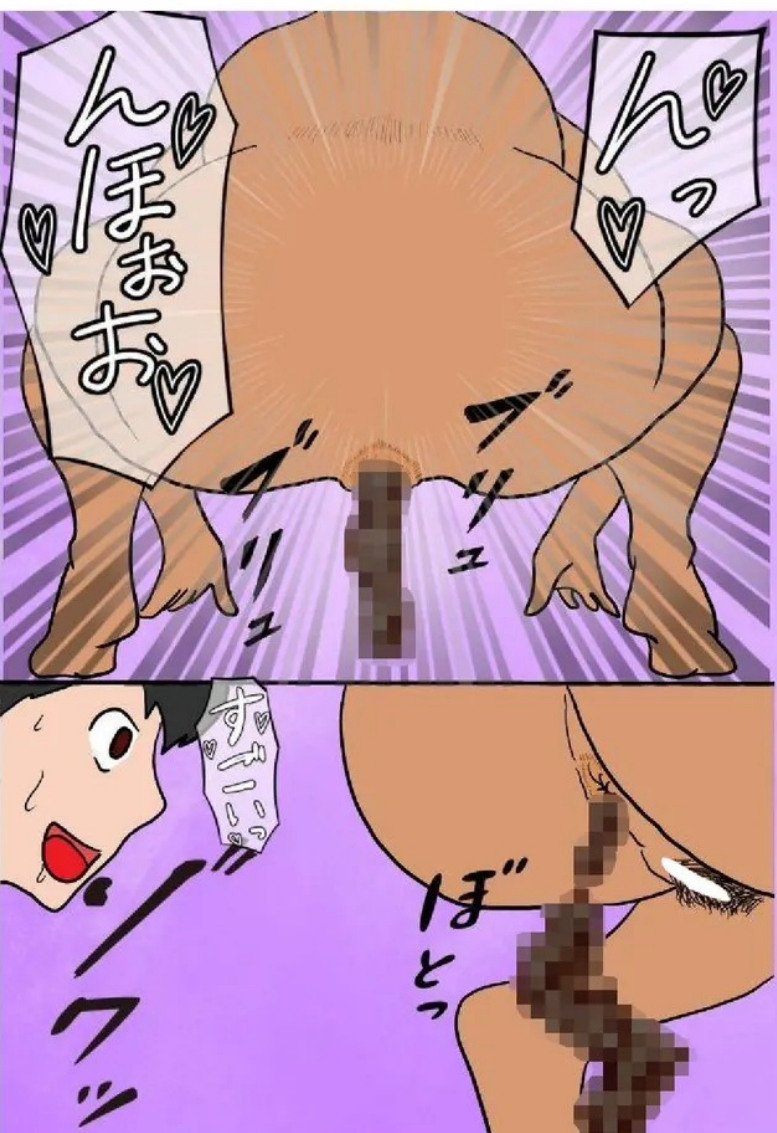


「見てえー！見ろおおー！母ちゃんのケツ穴からブリブリうんち見ろおおー」

「すごいーすごいやー！母ちゃんのケツから汚い糞が沢山出てくるっ！」

「恥ずかしいいいいん、全部っ、全部出していいっ!？」

「出せっー！母ちゃんもっとうんこ出せえー！」



「ふ、噴くっううー! うんち噴いち

まうううー!」

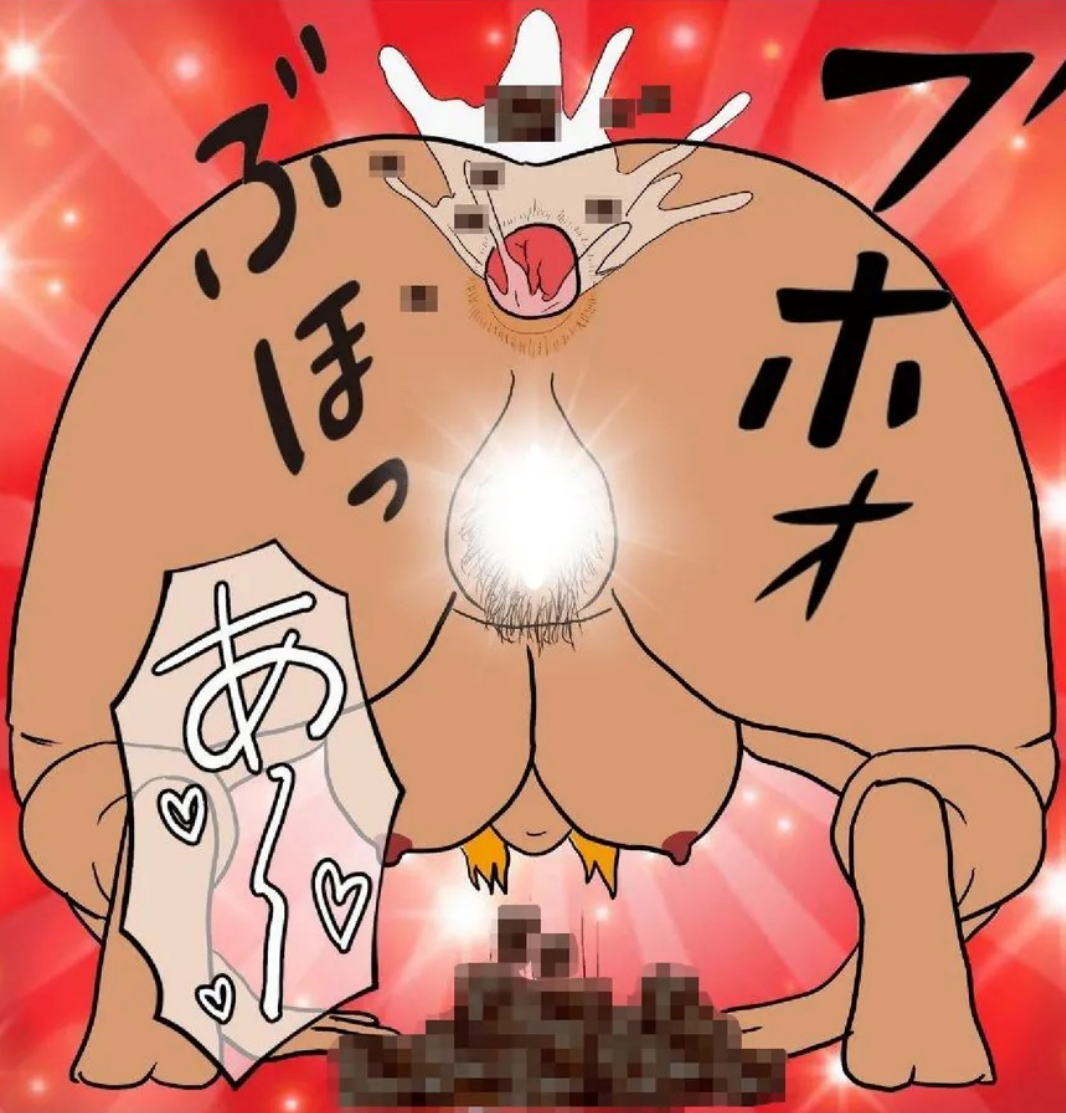
フ

ホ
オ

ぶ
ほ

あ
く

「ああっ凄いつ! 母ちゃんのうんこ噴水みた
いだよお!」





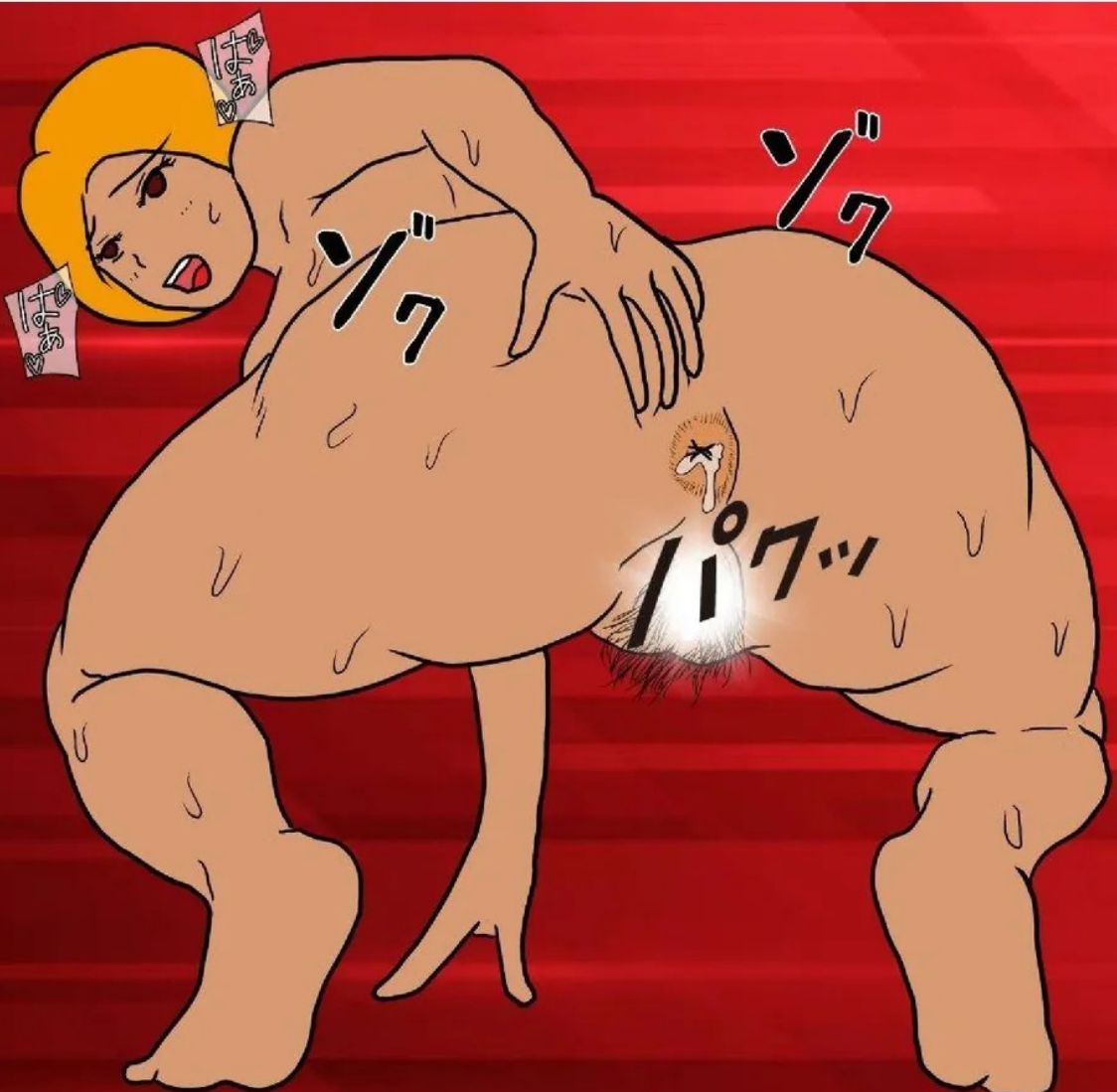
「はあ・・・はあっ・・・!? な、なに
してるんだい!？」

「母ちゃん、もうちょっと、もうちょっとその
ままでっ!」

「あ、あんた、母ちゃんのうんちでそんなに硬
くして・・・堂々と母親の前でシユって・・・」

「あんなに凄いの見て・・・我慢できないんだ!
このままシユらせて!許してよ、母ちゃん!」

「おっ、女の前でオナニーなんてしてんじゃないよ！男なら男なら・・・」



「目の前でぽっかり開いた母親のケツ穴に突っ込むぐらいの度胸見せてみなあッ」
☒



「かつ、母ちゃんっ！犯ってやるっ！
母ちゃんのケツマ〇〇犯るからなあ
っ、オラあっ！」

「おうううっ！……犯られたああんっ、
息子のチ〇ポが糞まみれのケツにズボっ
て来たああ！」

「母ちゃんっ、凄いいっ！俺たち親子で
ケツ穴交尾してるんだよっ？」

「こっ、交尾じゃないからっ！け、ケツ穴にチ
○ポ突っ込まれてるだけっ！セックスじゃない
わよおお！」



「意地張るなよ、実の息子のチ○ポでケツの
奥、ゴリゴリ抉られて気持ちいいんだろ？」

「ひいいいっ、きっ、気持ちいいい！糞まみれ
のケツ穴相姦気持ち良すぎるッう！」

「可愛いよ、母さん・・・ご褒美だ！」

「おらっ、糞塗れのケツ穴っ、息子精子
で受精しろおおお！」

どびゅ

「あゝ肛門の中、あつっいいいいケ
ツ穴で息子の赤ちゃん孕んじやうううう」



「



「はあはあ・・・母ちゃん・・・」

「いやらしい子だよ・・・母ちゃんをこんなに
して・・・」



「ん？ど、どうしたの？固まっちゃって・・・」

「う、うるさいっ、今抜いたらまた出ちゃう
んだよ！」

「いいよ、母ちゃん。俺母ちゃんも母ちゃんの
糞も大好きなんだから」

「ほら、抜くよ母ちゃん」

「いやあん、駄目え!」

「おほっ、すっげえ糞っ!」

「恥ずかしいいいい・・・」

「チ○ポがくっさい糞に包ま
れて暖かいよ母ちゃん」

「母親にここまでして・・・責

任取ってくれんだろ?」



「責任って?」

「母ちゃんのこと・・・これから可愛がって
くれるかい?」

「当たり前だろ。大好きな母ちゃん。これからは俺を悦ばせるケツ穴糞奴隷にて可愛がってやるからね。」

「・・・はい☒いっぱい可愛がってください☒」



母ちゃんの排泄物で興奮してしまった俺を受け入れた母ちゃん。

血の繋がりというのは凄いもので、母ちゃんもまたそういう行為に興奮しのめり込んでいった。

いや、母ちゃんが隠れた変態性が俺に遺伝していたというのが正しいかも知れない。

こうして俺たちは親子というもっとも近くに居る相手を性癖を満たす最高のパートナーにすることが出来たのだ。

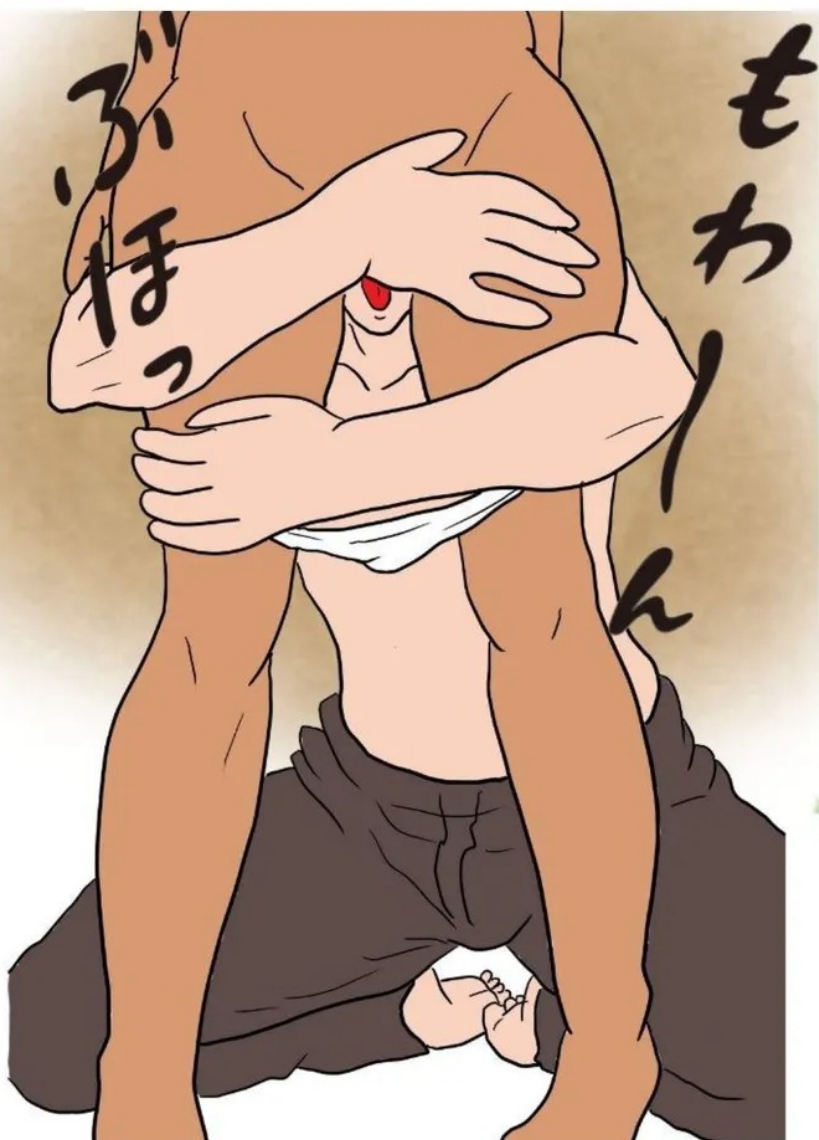
母子家庭の俺たちを止める障害は何もない。欲望のままに毎日毎晩行為に及ぶ。

元ヤンで気の強かった母ちゃんは笑えるほどに可愛らしく従順になった。

彼女の心も身体も・・・いや身体から放出されるものでさえ全て俺のものになったのだ。

「すうく。。。はあつ、くっせえ」

「いやああんおなら、そんなに嗅がないで
ええ」



「母ちゃん、もっと、もっと俺のために尻こ
こいてみろ！」

「だめえ。。。力んだらもっといろんなもの出
ちゃうからああん」

「いろいろってなんのこと？」

「あつ、そ、そこお・・親子でオマのこはだ
めよおお・・」



「じゃあ、早く。早く俺のために出してよ。
喉が渴いてるんだ。」

「う、うん、分かったから。待ってね・・」

「んぐっ・・・んっ・・・ん・・・しっこーおいし
いっ母ちゃんのおしっこ」

「あああ・・・そんなに飲み干さないでえ」



「はあはあ・・・嬉しいんだろ？息子に小便ぶ
っかけて。」

「ああいやらしいい・・・ドキドキするのぉ♡」

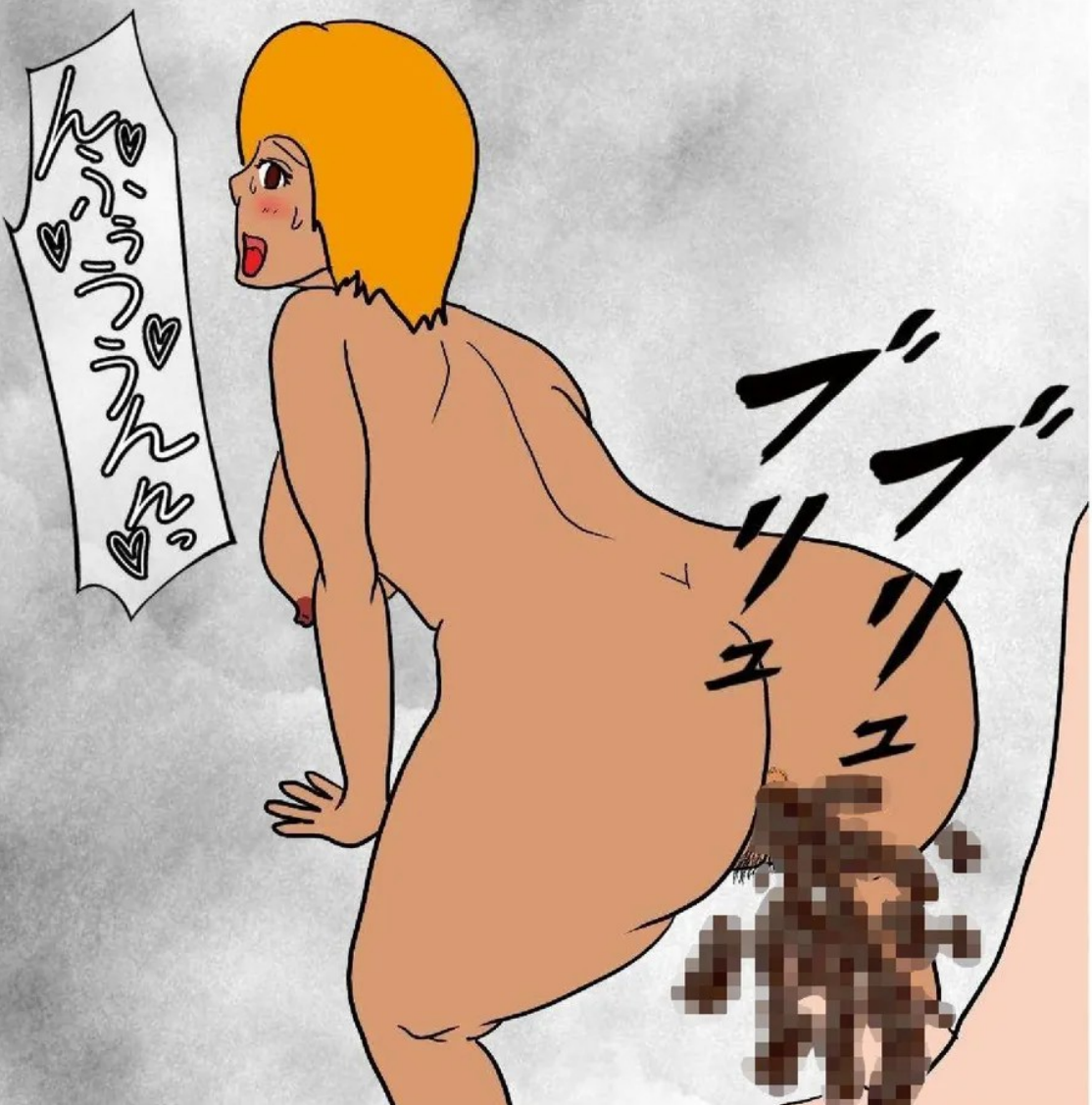


「ほら、母ちゃんケツ出せよ、待ってるんだろ?」

「はいいい、お願いしますっ♡」

「大好きな息子チ○ポに糞ぶっかけてみろよ」

「んっ、んっ、すぐっ、すぐ糞出ますっ!」



「あゝああああ！息子チ○ポにうんちひっ
かけちゃうううううう！」

「ああああ！暖けえ母親糞っ！
最高だああ！」

「すげえ量の糞っ、俺の胸にまでひり出すんだな！」

「ご、ごめんなさいっ、うんち止まらなくてっ……」



「……か、母ちゃん！俺に母ちゃんの糞食わせてくれよ！母ちゃんの糞食って、母ちゃんと一つになりたいんだ！」

「う、嬉しい☒そんなにまで母ちゃんを好きでいてくれるのねえ☒」

「愛してるっ、息子だけと愛してるのお！
母ちゃんの全部あげる☒母ちゃんのうんち
で母ちゃんの全部受け止めてえええ！」

俺の口の中に物凄い便臭と苦みが拡がった。ああ、これ
が母ちゃんの味なんだ。俺は口いっぱい母ちゃんの愛
を頬張って飲み込んだ。
一生愛し合って暮らそうと心に決めて。





愛し合う俺たち親子はまるで夫婦のように毎日を送っている。

「あゆみ、晩御飯はまだ？今日は何？」

「うふふ、今用意するわあなた...またカレーで良いかしら？」

「当たり前だろ、俺はあゆみのカレーが一番好きなんだから。」

「嬉しいずっと...大好きよ、あなた」

◆おわり◆



おまけイラスト

